





被服廠跡に生じた火災旋風

大正12年9月1日、地震後市内各所に発生した火災は、次第にその延焼範囲を拡大し、午後3時半ごろには旧本所区一帯も猛火に覆われた。人々は公園に造成予定されていた約7万㎡の被服廠跡へ、そくそくと避難していた。その数は約4万人といわれている。川幅140mの隅田川をうしろに控えて、避難民の誰もが安心しきって、周辺の火災のおさまるのを待っていた。

一大ごう音と共に強風が来襲して、持ち込んだ家財道具に火の粉をまきちらし、避難民の頭上に火炎をはわせた。竜巻性の強い風は、人間はおろか大八車も上空へ卷上げたという。猛烈な風が吹き荒れたのは約20分間といわれ、文字通り瞬時の間に3万8千の人々が焼きつくされたのである。震災記念堂に掲げられてあるこの絵は、阿鼻叫喚の修羅場となった被服廠跡の状況を描いたものである。

被服廠跡にあの時点で、どうして火災旋風が発生したのか、この問題は学界でも注目された。東京大学教授寺田寅彦や中央气象台技師藤原咲平等当時のそうそうたる学者によって、惨事発生後、直ちにその原因調査が始められた。しかしながら、世界の災害史上にも全く例を見ない異様な現象だったこともあって、その真の原因は究明しつくし得なかったようである。

最近になって、この火災旋風は、地震後生じた広域大火災が原因であることが明らかになってきた。当時の気象条件が旋風発生の下地になっていたことは否めないが、被服廠跡周辺に広大に広がった大火災がその元凶だったのである。見方を変えると、広いと思っていた被服廠跡は、その面積の数倍にもおよぶ広域火災域に囲まれていたのである。そこへ人々は自らの意志で、あるいは警官に誘導されて避難していた。火災旋風の発生機構がある程度判ってきた現在の視点からすれば、被服廠跡は極めて危険な状況下にあったのである。

遠からずして再び関東南部に大地震の起ることが、地震学者によって予測されている。東京、横浜あるいは川崎等の大都市は、50年前とは比較にならぬほど膨張し、また過密の度も増している。いったん大地震がこの地を襲ったら大火災は免れ得ないであろう。被服廠跡の惨事は過去のものとして片付けるわけにはいかない。

(気象研究所物理気象研究部・相馬清二)